

学位論文審査の要旨

| | | | |
|-------|---------------------------------|-------------------|---|
| 学位申請者 | 野田 亜由美 人間発達科学専攻2015年度生 | 論文題目 | 過去の感情的傷つきに対する Emotion-Focused Therapy の効果に関する検討 |
| 審査委員 | 主査: 高橋 哲 准教授 | インター ネット 公表 | 学位論文の全文公表の可否: 否 |
| | 副査: 石丸 径一郎 教授 | | 「否」の場合の理由 |
| | 副査: 山田 美穂 准教授 | | <input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む |
| | 審査委員: 平野 真理 准教授 | | <input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある |
| | 審査委員: 岩壁 茂 教授 (立命館大学) | | <input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている <input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている <input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている |
| 学位名称 | 博士 (社会科学) | | |
| (英語名) | (Ph. D. in Clinical Psychology) | | ※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について |

学位論文審査・内容の要旨

本博士論文は、臨床心理面接における感情の役割を重視した心理療法であるEmotion-Focused Therapy (以下EFTと記述)が、挫折や失敗など過去に生じた感情的傷つきの問題に現在も悩まされる成人に対してどのような効果をもたらすのかについて、量的および定性的な分析を通じて多面的に検討したものである。心理療法の効果に関する実証研究は臨床心理学において重要な研究領域の一つであるものの、多大な労力を要することもあり、北米やヨーロッパと比較すると日本では研究の数が限られており、知見が十分に蓄積されていない現状にあることに加え、諸外国のEFTに関する先行研究においても、クライアントの変化の妨げとなる要因や心理療法中に体験している困難に着目した研究が不足していること、介入終了後に効果が維持されているかといったフォローアップの研究知見が不足していること等の問題意識から研究が実施された。

本論文は全7章から構成され、大別して4つの実証研究が報告されている。研究1ではEFTによる介入前後のアウトカム尺度の量的分析を通じて効果の検証が行われ、各種指標の値から同介入は過去の感情的傷つきの改善に資するだけでなく、各種精神症状や感情調節機能、ポジティブな心理機能など幅広い領域での効果が見出された。研究2では、介入によるクライアントの変化のメカニズムを理解するため、介入後に実施したクライアントに対するインタビューデータの質的分析を通して、その主観的体験が探索された。その結果、面接内の作業や気づきを日常生活で実践し成功体験を得ることを通じて変化がなされていくことや、心理療法の過程で感情を抑えずに表出することが改善にとって欠かせない要素であるとの知見が得られた。さらに、研究3では、介入後のアウトカム尺度の結果から、改善の度合いが相対的に大きい事例と小さい事例を抽出し、2群のクライアントが心理療法の最中に体験していた困難に関する語りの違いを検討した結果、両群には主に感情体験の深さと初期の治療関係に体験の違いが認められ、クライアントが大きな肯定的変化を体験するためには、心理的苦痛を伴う一次不適応感情に取り組むことが肝要であることが示唆された。最後に、研究4では、介入終了から6ヶ月後の時点において介入終了直後の効果が維持されているかフォローアップの検証を実施したところ、一定期間経過後も多くの指標において概ね効果が維持されていることが確認された。

審査過程と審査結果の概要は次のとおりである。審査会は2023年9月13日、同年11月30日、2024年1月18日の計3回行われた。審査当初より研究テーマの社会的意義や臨床的有用性は高く評価された一方で、大規模プロジェクトの中で申請者が果たした役割や貢献が不明確であること、感情的傷つきや効果といった本研究の中核概念の定義に曖昧な面が残されていること、EFTに対する批判的な視点からの検討が十分とは言えないこと等について指摘を受け、記載を充実させる必要性が指摘された。また、統計手法の再検討や分析結果の追加に関する助言も受けた。その後、それらのコメントや助言を反映した上で修正稿が提出され、審査を行った結果、審査委員からの指摘に沿った十分な修正がなされたと判断され、公開発表に進むことが許可された。公開発表においては、明瞭なプレゼンテーションおよび質疑への適切な応答がなされたことが確認された。

最終審査時においては、学位論文の質、発表・研究スキルのいずれにおいても、十分な水準に到達していることが確認され、本審査委員会では、申請者が今後も研究と実践を両輪として高い水準で活躍していくことが期待できるとの見解で一致した。したがって、本審査委員会では全会一致で、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科の学位、博士(社会科学)、Ph. D. in Clinical Psychologyを授与するのに値するものと判断し、合格とした。